

Title	山片蟠桃『夢ノ代』雑書篇訳注(五)
Author(s)	岸田,知子
Citation	中国研究集刊. 2014, 58, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58640
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

山片蟠桃 『夢ノ代』雑書篇訳注(五)

岸田知子

た。これに句読点等を施した日本思想大系(岩波書、、テキストは、関西大学図書館所蔵写本を底本とし

、漢字は常用漢字を用いた。店)本を参照した。

、送り仮名・振り仮名のうち片仮名は底本による。平、コト、ドモ、シテを記す記号はカナ表記に改めた。

挿入した。一、底本の欄外書き込みは(欄外:)として該当箇所に

仮名は訳注者が施した。

われる。岩波本に従って本文中に挿入した。、[] は底本では章末にある。別本に拠るものと思

べくわかりやすく詳しく書いた。、各章のタイトルは訳注者がつけた。なお、注はなる

十六 《学問の流れと読むべき書物》

多ク孟子ノ外ハミナ志情ヲカ子テ云寸®ハ或ハ悪ト云混 場子ノ我為ニシ墨氏ノカ子愛スル®、表裏ノ差ヒニテミ 力道二背ク。孟子コレヲ闢キテ廓如ナリ®。シカルニ®コトシルベシ。シカルニ®荘子ヲ南華真経®ト号シ、列子ヲルベシ。シカルニ®荘子ヲ南華真経®ト号シ、列子ヲカラズ。ソノ標的同ジカラザル寸®ハ善ト云トモ悪トニニッとした。カラズ。ソノ標的同ジカラザル寸®ハ善トスル・コトンルベシ。スデニ告子®ノサス処モ亦荀子トモ云次第ナルベシ。スデニ告子®ノサス処モ亦荀子トモ云次第ナルベシ。スデニ告子®ノサス処モ亦荀子トトモ云次第ナルベシ。スデニ告子®ノサス処モ亦荀子トトモ云次第ナルベシ。スデニ告子®ノサス処モ亦荀子トトモ云次第ナルベシ。スデニ告子®ノサス処モ亦荀子トトモス次第ナルベシ。スデニ告子®ノサス処モ亦荀子トカラズ。ソノ標的同ジカラザルナッのでは、表裏ノ差ヒニテミカラズ。ソノ標的同ジカラザルナッのでは、表裏ノ差ヒニテミ揚子ノ我為ニシ墨氏ノカ子愛スル®、表裏ノ差ヒニテミ揚子ノ我為ニシ墨氏ノカ子愛スル®、表裏ノ差ヒニテミ揚子ノ我為ニシ墨氏ノカ子愛スル®、大家のできないである。

鄭 玄・班固・馬融・蔡邕・何晏・趙岐・王弼・韓愈ヨとようけん。 まま かかん きょう きゅうじゅつ 東ラ注スル人々且歴史ヲ編ム人々ニヲヒテハ、孔安国・書ヲ注スル人々且歴史ヲ編ム人々ニヲヒテハ、孔安国・ キテ見ル寸®ハ老・荘・列ノ諸子ヨリハ愈ル®ベシ。説スルト云トモ害ナカルベン®。荀子ノ書、性悪ノ説ヲ除 賢並ビ出テ、終ニ朱先生ニ極マリ、六経ノ旨趣蘩然®亦リシヲ、宋ノ世ニ至リテ、二程・周・張・欧・蘇のノ大 リシテ、孔頴達ノ注疏ニ備ル@。 公・孔子・顔・曽・思・孟のノ大賢教へヲ施シ玉フニ引莊子ノイハユル重言の也。)漢土ハ上古ノ神聖ヨリ、周 世二明ラカニナリヌ。ソ シムベシ。漢魏叢書®ノ目ヲ以テソノ人ナキヲシル。経 ミ。ソノ学風ノ流弊ツイニ老荘ニ混濁セラル、コトカナ ベシ。シカレトモ@孔子ノ言ヲ引モノ、論・孟・中庸 ナリ。願クハ我子孫タルモノ、宋ノ諸賢ノ書ヲ習読シ ハルぐ~著ス処多シトイヘドモ、ミナ妄誕杜撰ノ書ノ カヘテ、戦国ヨリ秦・漢・六朝・唐・五代マデノ儒者カ 大学ニ出ルノ外ハミナ妄説也♡。決シテ♡信ズベカラズ。 、欄外:諸子 及 雑書ニ孔子ノ言語ト称スルモノハ、ミナ® 書ヲ前ニヨミテ、後ニ宋賢ノ書ヲ読ム寸®ハ、失フコ 小学・近思禄・二程全書・語類・語録®ノ書ニー詳ー明ラカニナリヌ。ソノ説、四書五経ノ注解ヨリシ 後ニコノ書ヲ見テ足ラザルヲ補フベシ。却ッテ®コ シカレドモ猶未ダ®カ

注

②揚雄の『法言』吾子篇に「古者楊墨塞路、 ①岩波は「揚子」を「楊子」に、「墨氏」を「墨子」に、 父也、 りと開け放ったという。 ま。昔、楊朱や墨翟の教えが風靡して世の中の道を塞 不帰楊則帰墨、楊氏為我、 侯放恣、処士横議、楊朱墨翟之言盈天下、天下之言、 本篇十二に既出。『孟子』滕文公下に「聖王不作、諸 いでいたとき、孟子がこれを断ち切り、 「カ子」を「カネ」に作る。揚子は揚朱、 廓如也」とある。 無父無君、是禽獣也」とある。 廓如は心がからっとして広 是無君也、 世の道をから 墨子は墨翟。 孟子 辞 いさ

③岩波 ④揚朱は自作の書を残していないが、 がある。 一然ルニ」。 ここは『荘子』ではなく『列子』をいうので

"列子』に揚朱篇

あろう。

⑤異端のこと。 斯害也已」とあり なお 「異端」 は 聖人の道でない 論 語 為政 篇 別の学説の 攻乎

⑥岩波「然ルニ」。

⑦唐の天宝元年(七四二)に『荘子』に『南華真経』が

岩波頭注では景徳二年(一○○五)となっている。四年(一○○七)に『沖虚至徳真経』が命名された。⑧唐の天宝元年に『列子』に『沖虚真経』が、宋の景徳

⑨岩波はこのあとに「コト」がある。

⑩「荷子」は「荀子」の誤記⑩ 「差謬」の誤記。

⑬岩波「トキ」。

子』告子篇に出ている。告子は性には善も悪もないと⑭十三に既出。性をめぐって孟子と論争したことが『孟

在していると説いた。 ⑮岩波「揚雄」。揚雄は『法言』にて性には善と悪が混

主張した。

⑯岩波「カネテ云トキ」。

(で) 「ベン」は岩波「ベシ」。朱子学では性を理(本然の)の「ベン」は岩波「ベシ」。朱子学では性を理(本然の)の「ベン」は岩波「ベシ」。朱子学では性を理(本然の)の「ベン」は岩波「ベシ」。朱子学では性を理(本然の)の「ベン」は岩波「ベシ」。朱子学では性を理(本然の)の「ベン」は岩波「ベシ」。朱子学では性を理(本然の)の「ベン」は岩波「ベシ」。朱子学では性を理(本然の)の「ベン」は岩波「ベシ」。朱子学では性を理(本然の)の「ベン」は岩波「ベシ」。

⑧岩波「トキ」。

②漢の劉向の著。春秋時代から漢初までの人々の伝記⑩岩波「マサル」。

②この三書は十二に既出。 逸話を集めたもの。

②岩波「然ドモ」。

独岩皮「ひ」との岩波「ナリ」。

②岩波「皆」。 ②岩波「必シモ」。

を借りて述べた言葉。
窓十五に既出。信頼性を増すために、昔の聖人賢人の名

器岩波「漢・魏ノ叢書」。叢書は、ここではこまごまと(子思)で、『中庸』を書いたとされる。孟は孟子。(字は子淵)、曽は曽参(子輿)。思は孔子の孫の伋②堯・舜より以来の聖人の道を伝える道統。顔は顔回

馬融の弟子。多くの経書に注釈を施し、今文と古文をという(現在のものは晋の偽作)。鄭玄は後漢の人。孫。『古文尚書』の伝(注釈)を書いた。これを孔伝颂岩波「備ハル」。孔安国は漢の人。孔子の十二世の子

書名ではない。

してまとまりのない書物の意。『漢魏叢書』という叢

愈は中唐の人で、『五経正義』とは時代が合わない。 ちは中唐の人で、『五経正義』とは時代が合わない。 ただ、理がした。 班固は後漢の人。『孟子章句』を著した。 芸聞は三国趙岐は後漢の人。『孟子章句』を著した。 王弼は三国趙岐は後漢の人。『孟子章句』を著した。 王弼は三国趙岐は後漢の人。『孟子章句』を著した。 王弼は三国趙岐は後漢の人。『孟子章句』を著した。 王弼は三国趙岐は後漢の人。『五経正義』を撰述した。「注疏」はそれぞれの経の『正義』(注)、およびその注を疏という。 ただ、韓の『正義』(注)、およびその注を疏という。 ただ、韓の『正義』(注)、およびその注を疏という。 ただ、韓の『正義』(注)、およびその注を疏という。 ただ、韓の『正義』(注)、およびその注を疏という。 ただ、韓の『正義』(注)、およびその注を疏という。 ただ、韓の『正義』(注)、およびその注を流とは時代が合わない。

い、朱子学の先駆者として位置づける。の四人に邵康節(雍)を加えた五人を北宋五子といの四人に邵康節(雍)を加えた五人を北宋五子とい横渠(載)・欧陽脩・蘇東坡(軾)をいう。なお、前鐵程明道(名は顥)・程伊川(頤)・周濂溪(敦頤)・張

∞岩波「イマダ」。

32岩波「粲然」。

選び、初学者の入門書としたもの。『二程全書』は二は『近思録』の誤記。朱熹・呂祖謙の共著。程明道・伝えられたが、その弟子の劉子澄の著作。『近思禄』の、小学』は日常道徳について述べた書。宋の朱熹編と

合は、善といっても悪といっても言う人次第であるとい指している性が同じではない。その標的が同じでない場

孟子の善とする性と、

荀子の悪とする性とは、

39岩波「却テ」。

③岩波「トキ」。

【現代語訳】

場朱の利己主義や墨子の性善説を批判している。しかるだけで、どちらも道にそむいている。孟子は、(楊・るだけで、どちらも道にそむいている。孟子は、(楊・のであるから、聖人から見れば異端であることを知らなのであるから、聖人から見れば異端であることを知らなければならない。それなのに『荘子』を『南華真経』とければならない。それなのに『荘子』を『南華真経』とければならない。それなのに『荘子』を『南華真経』とは、後世の人の誤りであることを知るべきである。

人があっても害はないといえよう。 と情を兼ねて性という場合は、悪という人、混在という ものではないだろうか。たいてい孟子以外の人がみな志 また荀子と同じである。 えよう。 すでに(『孟子』に登場した)告子の指す性も 揚雄の善悪混在説は見識のない

孔子の言葉と称するものは、どれも荘子のいわゆる「重 必ず信じてはならない。(欄外:諸子百家の書や雑書に 子』の諸子よりは優れているだろう。『説苑』『淮南子』 『大学』に出ているもの以外は、どれもでたらめである。 『孔叢子』『楚辞』の類は読んでも害はないはず。 『荀子』の書は、性悪説を除けば、『老子』『荘子』『列 孔子の言葉を引くものは、『論語』『孟子』『中庸 しか

0)

言」である。)

編纂した人々については、孔安国・鄭玄・班固・馬融 がて老荘思想に混じってしまったことは悲しむべきであ 者が次々に著述したものは多いけれども、 引き比べて、戦国より秦・漢・六朝・唐・五代までの儒 参・子思・孟子という大賢が教えを施されたが、それに かったことが めでいい加減な書ばかりである。その学風の流れが、や 漢や魏の書物の目次を見ても、該当する人がいな 国は上古の神聖の時代から、周公・孔子・顔回 わかる。 経書に注を施した人々や歴史書を どれもでたら 曽

> は、 蔡邕・何晏・趙岐・王弼・韓愈以下、孔顥達の注意は、 かかん できょう まりかつ が多いであろう。 を前に読んで、その後に宋賢の書を読むのは、失うこと を見て足りないところを補ってほしい。反対に、この書 まって、『小学』『近思録』『二程全書』『語類』「語録 世に明らかになった。その学説は四書五経の注解に始 に朱先生に行きついて、六経の趣旨が燦然と輝き、 欧陽脩・蘇東坡という優れた賢人が続いて登場し、最後 あったのを、宋代になって、二程子・周濂溪・張横渠 備わっている。しかしながら、それでもまだ不十分で 書において詳しくわかる。願わくば、 宋の諸賢の書を学び読んで、そのあとで私のこの書 繰り返して言うが、 読む順を乱しては 私の子や孫に 流に

十七 《日本における学問》

1

けない。

二足利氏御ヲ失フニ至ル⑦。士大夫®ニ学アル人ナシ。 紀二淮南子ノ語ヲ引カレシヲ以テミレバ⑤コレ亦古へルイノミニテ、忠孝仁義ノ学ハウトカリシナラン。日本 我邦ニテハ応神天皇ノ時ヨリ論語 ヨリアリシナラン。源平ノ後ヨリ文学®スタレテ、 レドモ①中世ニハ徒②ニ仏書・詩書 ・千字文渡リショシナ 蒙蒙家 (3) 世世説

字ヲシルモノハ唯僧家ノミ。シカルニ惺窩®・羅山®ノニ先生出テ、文学始メテヒラク。ソレヨリシテコノ道ニス・まで、文学始メテヒラク。ソレヨリシテコノ道ニス・まで、本数 生氏・太宰氏・新井氏・貝原氏・伊藤氏父子・養見氏®等、数輩相運デコレガ最タリ。中ニモ室・チ・浅見氏®等、数輩相運デコレガ最タリ。中ニモ室・子・養見氏の等、数輩相運デコレガ最タリ。中ニモ室・子・養見氏の等、数輩相運デコレガ最タリ。中ニモ室・子・養見氏の等、数輩相運デコレガ最タリ。中ニモ室・オリアの論の、当世ニアリテハ、我門ノ諸先生のノ書ランルモノハ唯僧家ノミ。シカルニ惺窩®・羅山®ノスルコトハの論ノコトナリ。カヘスぐ〜モ門流ノ学流ニ反スルコトハの論ノコトナリ。カヘスぐ〜モ門流ノ学流ニ反スルコトナカレ。

注

すでに移入されていたからであると見なす説もある。る。『日本書紀』において『論語』の名がないのは、『千字文』(例えば魏の鍾繇の作)であるとする説もあ『千字文』が書き込まれたのではないか。また、別のいて、学問入門の書として有名であった『論語』といて、学問入門の書として有名であった『論語』と

③本篇五に既出。 ②岩波「いたずら」と読んでいる。

あるに基づき、「其清陽者、薄靡而為天」云々は同天撰『淮南子』俶真訓に、「古天地未剖、陰陽不判」と「古天地未剖、陰陽不分」とあるのは漢の淮南王劉安⑤本書神代第三の七に詳述。『日本書紀』神代巻巻首に④南朝宋の劉義慶の著『世説新語』。本篇五に既出。

うになったのは明治以後である。で用いられている。これが現在の意味で用いられるよ⑥『論語』先進篇のいわゆる四科に「文学」は学問の意

文訓に基づく。

圏を指す。圏本来は中国の高級官僚をいうが、ここは日本の支配階に至って織田信長に滅ぼされた。一御」は統制力をいう。室町幕府は第十五代足利義昭

び、儒を以て世に立つ。 藤原惺窩。はじめ相国寺の僧であったが、朱子学を学

9

(12)室氏 新井白 とその子の 荻生氏は荻生徂徠、 は 室鳩巣、 東 貝原氏は貝原益軒、 涯ら、 熊沢氏 浅見氏は浅見絅斎 は熊 太宰氏は太宰春台、 沢蕃 伊藤氏父子 Ш 中 江 は 氏 伊藤 は 新井氏は 中 江

⑬助けること。

④懐徳堂の中井諸先生をいう。

【現代語訳】

新語 斎 思われる。 文』が渡来したということであるが、 山 知る人はただ僧侶だけであった。そこに藤原惺窩と林羅 滅んでしまう。 るのを見ると、この書も古くから日本にあったのであろ に読まれたのはただ仏教書や詩の書物、『蒙求』『世説文』が渡来したということであるが、中世において人々 の二先生が出て来られ、 我が国に 源平の時代以後、 工鳩巣、 類いだけで、忠孝仁義を説く学には疎かっ の道 『日本書紀』に『淮南子』 おいては、 熊沢 に功 支配階層に学問 蕃山 績 0 学問は衰退し、 応神天皇のときに あ 中 る人は多い 学問が初めて開かれ 江 一藤樹、 のある人はおらず、 荻生徂 it の言葉を引い やがて足利幕府は ń だとも、 一『千んじ 太宰春 Ш たと それ 字を てあ 崎 閣

> とは 問に反してはならない。 た。 述が最も多く、 であった。中でも室 見絅斎など、 もちろんである。 現在においては、 新井白 石 何人もの人たちが相次ぎ、 貝原益軒、 経書の趣旨の理解を助けるものであっ ・熊沢・ 我が懐徳堂の諸先生の書を読むこ 繰り返して言うが 伊藤仁斎とその子 貝原・ 伊 藤 この の諸 我が門:)頃が 東涯 先生 :最盛 は 浅

十八 《坐右におくべき書》

至リ、 六論衍義⑤ ソノ余ハ大抵忠孝仁義ヲ宋母トシ勧善懲悪ヲ心トスル賢 誦 \exists 後世ヲ惑ハスノコトニシテ、 博学ヲ以テ人ニ称セラル、人ノ著ス処ノ書、 ノ旨、 唐・宋ノ諸賢、 下六朝ノ叢書ト実ニ霄壤 コレヲ見ルベシ。自カラ得ル処アルベシ。 貞 観政要① リ六朝ニ至ル、 詩 章®多ク、 イタルカナ®。 夷狄トイヘドモ、 ・名臣言行録 帝範⑥・臣軌 \pm 漢以来ヲ一新スト云ベシ。 ミナコレ也。 李 ⑫ ア、古へヨリ儒ヲ以テ自カラ居リ、 壊®ノ差ヒ、 康熙⑨ノ徳沢四海ニ及ブ。 2 ゴ ⑦等ノ書、 世教トナルコト少シ。 \vdash 牧氏忠告③ 唐ヨリ以後ニ至リテ、 キ僻学アリ 同日 常二 ノ論ニアラズ。 坐右 漢 ツヾキテ清ニ 聖論 多くハ 魏 ニヲキ ヨリ以 ドモ、 訓系 天下 テ

所ヲ踏損ズル時ハ天下ノ廃物トナル。ヨク考フベシ コレ天下ノ大幸ナリ。荷モ学ニ志ス人、 コノ

注

①唐の呉兢撰。 もの。帝王学の教科書として我が国でも愛読された。 太宗と群臣との政治上の問答を収録した

②朱子撰、李幼武補。 宋の名臣の言行録

③「牧氏」は「牧民」 要点を書いたもの。 の誤記。元の長養浩撰。 民政上の

④清の世宗憲帝勅製。

康煕帝の聖諭十六条を広訓した

⑤明の范鋐撰。 もの。 の。なお、これを八代将軍吉宗が荻生徂徠に和訓さ 室鳩巣に和解を作らせたのが『六論衍義大意』で 太祖が作った六箇条の教訓を解説したも

⑥唐の太宗撰。 帝王たる者の模範を収

ある。

⑧天と地

⑦唐の則天武后撰。

臣下たる者の模範を収録

⑨清の第四代皇帝聖祖。 を確立した。 治政は六十一年に及び、 清の地

迎岩波 「至ルカナ」。

⑪文章を暗記し、 口先で読むだけだったり、詩文をただ

作るだけで実践を伴わない学問

(12))明の王世貞と李攀竜。 みなした。 彼らを古文辞派と呼び、 秦漢の文章や盛唐の詩を最高と 荻生徂徠に影響を

③かたよった学問

与えた。

⑭岩波 「宗」。

『六論衍義』『帝範』『臣軌』等の書は、いつも坐右『貞観政要』『名臣言行録』『牧民 忠告』『聖論』『は代語訳】 いて、これを読むべきである。 自然と得るところがある いつも坐右にお

はずである。漢・魏より以来、六朝の雑多な書とはまこ

になり、 すことになって、世の教えとなることは少ない。 になって、暗記や口誦、 ら六朝に至るまで、みなこのようであった。唐より以後 称せられている人が著した書は、多くは天下後世を惑わ あることよ。ああ、 優れた恩沢は四海に及んだ。 できる。続いて清に至って、 とに天と地の違いがあり、 唐・宋の諸賢たちは、 王世貞・李攀竜のような偏った学問があるけれ 昔から、 詩文をつくるだけの学問が盛 漢以来を一新したということが 同日の論ではない。 異民族ではあるが康熙帝の 聖諭の趣旨は至上のもので 儒者を自任して博学を人に 戦国

である。 うと天下の役立たず物となってしまう。 懲悪を志す賢者が多くいる。 その Ú かはたいてい忠孝仁義を中心として、 かりにも学問に これは天下にとって大いな 志す人は、 よく考えるべき ここを踏み損な 勧善

《『保建大記』 と『靖献遺言』》

元トス。 シテ讃 モ栗気 臣母五二参リテ、 上崩シテ、又ソノ⑫兄後白河帝立ツ。上皇ノ為ニ亦弟ナ 禅ラシム®。時ニ今上®三歳。上皇二十三歳。 衛帝ヲ生ム。ツイニコレヲ大子トシ、 ガ冠タリ。 著ス処ノ書、 以降武徳熾ニシテ、文家モ亦女シ②トセズ。 シテ又平治ノ乱ヲコル。 H 本ノ書籍多シトイ 関白忠通今上ヲ佑 殿山に遷せ、 先生 憤ョオコシ、 鳥羽帝位召 保建ハ保元建久でナリ。 一ノ保建大記⑤及ビ浅見先生ノ靖献遺言⑥コレ語がはない。 スコブル④孝弟仁義ヲ説クコト多シ。 レ 父子兄弟ミ 主 「ヲ崇徳帝ニ譲ル。ソノ後美福門院®近い、すとく フ。 ヘドモ、 ケ、弟頼長上皇ヲ輔ケ、 兄弟ノ争ヒトナリヌ。ツイニ⑪今 コレ ツイニ威権平氏ニウツリテ、後 ラ保 ナ敵トナル。 世 教 元ノ 二 王家ノ 衰 ハ保元ヲ 渉た 乱 崇徳帝ヲシテ位ヲ ル 卜云。 ハナシ。 ツイニ上皇敗 大儒 コレ 13 源 コレヨ 3 平武 日 1)

ユ

ルソノ人ニハ、

顔真卿

総追捕使®トナリテ、繋っいょし 難アリテ、ツイニ威権 ヲ立ツ。 トシ、 シル。 コシ、 盛り白 氏専ハラ褒貶議評ヲ立テ、 肉ヲ以テ相争奪ス。忠孝仁義ノ道イツクニカ在ルヤ。ノナリ。保元ノ大変®、上天子ヨリ文宦®・武官互ニ 意ヲ以テセズ。 ニ反シタル賊臣ヲ貶シテ、 ニ取ル。三仁ハ孔子スデニコレヲ称シ®、 ン。靖献 ク玩素®シテ考フル所アラバ、ソレ差 ルモノ、 ニナラヒテ∅乱臣賊子⋈ヲシテ罪ヲ入ル、 本ノ歴史モトヨリ褒貶ノコトナシ。 コトニシテ、二千年ノ天下ツイニコ、ニヲヒテ変スル 羽帝ノ徳ヲ失フヨリ興リテ®後白河帝ノ柄ヲ失フニ成 |河帝 人臣 ツイニ平氏ヲ滅シ、安徳帝入水、ソノ弟後鳥羽帝ンイニ平氏ヲ滅シ、安徳帝入水、ソノ弟後鳥羽帝ンが、ララン 挙ゲテソノ余コレニ類シタル忠臣ヲ褒シ、又コレ 故ニコレヲ挙ゲズシテ、 ノ位ヲ究メ、 ノ暗愚コレヲイカントモスルコトナシ。 、ツイニ威権頼朝ニ帰シ、後白河法皇ノ孫ナリ。ソレ ア、本朝ニヲヒテ未発®ノ書ナリ。 保元ノ大変®、上天子ヨリ文宦®・ ハ商書四ノ箕子四「自 万世ニ渉 屈平・諸葛亮・陶潜② 権勢ヲ弄ズ⑤。 永夕武家ノ有トナル。 リリテ議 天下ノ忠・不忠ヲ正スコ コレヲ与奪ス愛。 ロャスンシ 論 屈原以降 ナ 自献于先生」 カル 建久元年頼朝上下 コ、ニヲヒテ® ハザルニ 国ノ源氏 ベ ノ八忠臣 シト 天下ソ 処無カラシム ・武官互ニ骨とテ変スルモ ソノ元 ヨム ソノ意春 ユヘニ清 一庶歩 · ス。 八兵ヲオ モ ²⁹ ノ語 一卜私 がカ ル . ヲ ラ 秋 日 Ш

トシ読べシ。自カラ得ル処アラン。必シモ®コレヲ廃スする。まる。するます。まるす。まるまり、先コノ書ヲ以テ最ブモノナリ。我邦ノ述作ニヲヒテハ、崇 推論ズル忠臣数十人、 テ想像®スベシ。コ、ニオヒテカ予栗山浅見二先生ノコ 髄コノ書ニアリ。 ベカラズ。ユヘニ丁寧反復ス。 人必不忠ナラン。又コノ書ヲ以テソノ浅見氏ノ人トナリ ノ二書ヲツ子ニ愛玩スルコト久シ®。 謝 防得・ 劉因 コノ書ヲヨミテ涕ヲ堕サヾル人ハソノ ・方孝儒®ノ八忠臣也。 反賊モ亦数十人。ア、浅見氏ノ骨 ユヘニ論コ、ニ及 ソノ余、 引テ

注

で、ここは江戸開府以来の意。が江戸に幕府を開いたのが慶長三年(一六〇三)なのが江戸に幕府を開いたのが慶長三年(一六〇三)なのの年号。一五九六年十月から一六一五年七月。徳川家康

(15)岩波

「弄ブ」。

は高僧を指すから、意味の上でも「大儒」のほうが正③岩波「大徳」。頭注に「諸本『大儒』」とある。「大徳』②「女」は「少」の誤記。岩波「少トセズ」。

意。日本語としては、おびただしく、はなはだ、の意④すこぶると読む「頗」は、やや多く、かなり、という

しいと思われる。

⑤水戸藩儒栗山潜鋒撰。保元の乱から建久年間に頼朝が

となった。ここは前者の意と取っておく。

受桟見絅斎撰。桟見は崎門三桀の一将軍になるまでを記したもの。

一一五九年四月。建久は後鳥羽・土御門天皇朝⑦保元は後白河・二条天皇朝の年号、一一五六年四⑥浅見絅斎撰。浅見は崎門三傑の一人。

の年

号。一一九〇年四月~一一九九年四月。

⑫岩波「其」。

⑪岩波

「終ニ」。頭注に

「B本『時ニ』」とある。

③岩波「瀬平ノ武臣」。

朝の時代になり、守護・地頭が設置されるようになる安末期には総追捕使が寺社・荘園にも置かれた。源頼⑯追捕使は平安時代に治安を守るために置かれたが、平

⑰岩波「興リ」。

軍にあったから、

将軍の異称ともなった。

総追捕使の名は守護となった。

守護の任命権は将

18岩波「ナル」。

部では崇徳上皇と後白河天皇、摂関家では藤原頼長と卿保元元年七月に起こった「保元の乱」をいう。皇室内

忠通の対立が激化して争ったが、崇徳側が敗れて上皇 なったとされる。 は讃岐に流された。この乱が武士の政界進出の契機と

20岩波「文官」。

②岩波「ヲヒテカ」。

❷左に「アタヘウバウ」と記す。

② 『春秋』は孔子が善悪を褒貶して作ったとされた。

図君主や親に対し、道にはずれたことをする臣下や子の こと。『孟子』滕文公下に「孔子成春秋而乱臣賊子懼

《孔子、春秋を成して、乱臣賊子懼る)」とある。

②もとは『中庸』に出てくる語で、喜怒哀楽の感情がま ことを広くいうようになった。 だおこらないことをいうことから、まだ外に現れない

∞左に「モテアソヒモトメ」と記す。

② 『書経』の中の殷時代 (商ともいう) のことを書いた 部分。「湯誓」から「微子」まで十一篇ある。

窓般の紂王の一族。紂王を諫めたが聞き入れられず、狂 は箕子を朝鮮に封じた。 た時、招かれた箕子は「洪範」を教えたという。武王 人のふりをして身を保った。周の武王が紂王を滅ぼし

自ら靖んじ自ら先王に献ず」と訓読する。 『尚書』微子篇の言葉。「先生」は 「先王」 が正し

> ⑩三仁は本篇十三に既出。『論語』 微子篇に「微子去之、 子これを去り、箕子これが奴と為り、 箕子為之奴、比干諫而死、孔子曰、 殷有三仁焉」(微 比干は諫めて死

す。孔子曰く、殷に三仁あり)とある。

③下に列記する屈平 (字は原) より方孝孺にいたる八人

∞底本では「潜」をこざとへんに誤記。

をいう。

③左に「ヲモイヤル」。 ③正しくは方孝孺

⑤蟠桃は升屋の手代向けの教育のため、この書を講釈さ せているという(岩波頭注)。

③本書においては「必シモ」は「必ず」の意で用いられ ている。

【現代語訳】

かった。中でも栗山先生の『保建大記』や浅見先生のちの著す書には、少なからず孝弟仁義を説くものが多 もまた少なくはなかった。儒家の大学者といわれる人た 『靖献遺言』はその筆頭である。 るものはない。慶長年間以降、武道が盛んになり、 日本にある書籍は多いとはいっても、世の教えに関わ

「保建」とは保元建久のこと。天皇家の衰退は保元を

頼長は上皇を助け、 きなかった。 上皇にとってはまた弟になる。関白忠通は今上帝を、 帝は三歳、 できあがったのであって、 たことに始まり、 家のものとなったのである。 元年に頼朝は天下の総追捕使となり、 は苦労を嘗め、 立った。 氏を滅ぼし、安徳帝は入水して、その弟の後鳥羽帝が 弄ぶことになった。 平氏に移り、 因となって、 流されてしまわれた。これを保元の乱という。これが原 父子兄弟が皆な敵となった。 て、上皇は憤られ、 て今上帝が崩じて、 いて変化した。保元の乱は、うえは天子から下は文 後白河法皇の孫である。それ以後、 上皇は二十三歳であった。このことがあっ さらに平治の乱が起こった。そして威権は そのため清盛は人臣の位をきわめ、 暗愚な後白河帝はこれをどうすることもで やがて威権は頼朝のもとに帰 後白河帝が権力を失ったことによって 諸国の源氏は兵を起こし、 兄弟の争いとなったのである。 またその兄の後白河帝が即位した。 源・平の武臣が互いに入り混じり、 二千年の天下はつい やがて上皇は敗れて讃岐に その元は鳥羽帝が徳を失っ 以後天下は長く武 した。 義仲・ やがて平 権勢を やが 建久 弟

5,

ら、

亮・

る。

官・武官に至るまで、 **!義の道はどこにあるというのか。** 互. に肉親同士が相争った。

これを太子とし、

起源としている。

の皇后美福門院が近衛帝を生んだ。

そこで、

その

鳥羽帝が位を崇徳帝に譲った。

崇徳帝に位を譲らせた。その時、

今上

これに反した賊臣を誹謗して、天下の忠・不忠を正すこ は必ず不忠であろう。またこの書から著者浅見氏の人と 書にある。 忠臣である。 はないであろう。ここでいわゆる忠臣とは、 とには私意を用いなかった。これには万世に渉って議論 心にあげて、そのほかのこれに類した忠臣を褒め、 の箕子の「自ら靖んじ自ら先王に献ず」の を起こさないことに近づくのである。「靖献」は む者がよく内容を調べて考えつくことがあれば、 ああ我が国においていまだ見られなかった書である。 らって乱臣賊子に罪を興させないようにさせるもので、 てて歴史事実に当てはめた。 はなかった。ここにおいて栗山潜鋒氏が褒貶の批評を立 日本の歴史にはもともと外から褒貶の批判をすること これを取りあげないで、 三仁については孔子がすでにこれを称賛しているか 反賊もまた数十人いる。 陶潜· 顔真卿· 文天祥· 天下中が彼らが仁であることを知っている。 この書を読んで涙を落とさない人は、 そのほか引き合いにして論じた忠臣 屈原以後の八人の忠臣を中 ああ、 謝枋得 その意図は『春秋』 浅見氏の精髄はこの 劉因 語に 方孝儒 屈平 由来す 間違 その人 に数十 だか

まりを想像すべきである。ここにおいて、私は栗山・浅 は、まずである。読めば自然に得るところがあるであろう。必 きである。読めば自然に得るところがあるであろう。必 が国の著述においては、まずこの書を最上として読むべ が国の著述においては、まずこの書を最上として読むべ が国の著述においては、まずこの書を最上として読むべ が国の著述においては、まずこの書の論もここまでに及ぶのである。我

廿 《『大学衍義』》

今ノ密ト、古へノ実ト今ノ虚ト並べ行ハル、ユヘニ、今今ノ密ト、古へノ実ト今ノ虚トが行義のノ書ハ、上六経ヲ祖トシ、歴史ニ正シテ事実大学衍義のノ書ハ、キャットニアリ。為ルト為サルトニアルノミ。古へノ疎トずルトニアリ。為ルト為サルトニアルノミ。古へノ疎トヴァ、師ナクシテモ天下治マルベシ。徒コレ学ブト学バシテ、師ナクシテモ天下治マルベシ。徒コレ学ブト学バシテ、師ナクシテモ天下治マルベシ。徒コレ学ブト学バシテ、師ナクシテモ天下治マルベシ。徒コレ学ブト学バルトニアリ。為ルト為サルトニアルノミ。古へノ疎ト今ノ密ト、古へノ実ト今ノ虚ト並べ行ハル、ユヘニ、今今ノ密ト、古へノ実ト今ノ虚ト並べ行ハル、ユヘニ、今今ノ密ト、古へノ実ト今ノ虚ト並べ行ハル、ユヘニ、今今ノ密ト、古へノ実ト今ノ虚ト並べ行ハル、ユヘニ、今今ノ密ト、古へノ実ト今ノ虚ト並べ行ハル、ユヘニ、今今ノ密ト、古へノ実ト今ノ虚トが行行ル、ユヘニ、今今ノ密ト、古へノ実ト今ノ虚トが行行ルル、ユヘニ、今今ノ密ト、古へノ実ト今ノ虚トが行行ハル、ユヘニ、今

シテ聴ズ、美食並ベテ視ズ。惜ムベキカナ。
・**
ノ治法ハ能ハザルナリ。盛饌®備へテ食ハズ、雅・**

<u>注</u>

格物致知、誠意正心、修身、斉家の四大綱を説く。①宋の真徳秀撰。首に為治の要、為学の本を述べ、次は

②岩波「踏」。「蹜」は「せまる」の意。

家・治国・平天下を八条目とした。
③朱子は『大学』の格物・致知・誠意・正心・修身・斉

④両手で物を捧げ持つように、心に抱いて忘れずに守る

こと。『中庸』の言葉。

⑥岩波「階梯」。階段。目標に到達するための手引き。⑤岩波「従」。

⑦見事なごちそう。

すこともあるが、ここは上述の意であろう。⑧正しい音楽。平安時代以後に宮廷で行われた音楽を指

【現代語訳】

展開した。その項目の順序や要所の丁寧さはいうことが正心誠意、修身を説いて天下国家を治めるための実際をて事実を踏み行い、『大学』の八条目を並べ、致知格物、『大学衍義』の書は、古くは六経に遡り、歴史に正し

るのに聴きもせず、おいしい食べ物を並べても見ようと が備わっているのに食べず、正しい音楽が奏でられてい ので、今日の治法はうまく行われないのである。ご馳走 けである。昔の粗雑なものと今日の細密なものと、昔の を学ぶか学ばないか、なすかなさないかに違いがあるだ 政要』やそのほかの前述の書などを読めば、自身を修養 は、このような書を得られることである。加えて『貞観 を捨ててはいけない。後世に生れたことで得られる幸運 を返すよりたやすいであろう。繰り返していうが、これ で、この書を読んでいつも忘れずに心に抱いて、物事に できないほどである。上は天子から下は庶人に至るま しないようなものだ。惜しいことである。 実態あるものと今日の空虚なものとをならべて行われる て、師がなくても天下は治まるはずである。ただ、 あたってこれに従いさえすれば、天下を治めることは掌 し人を治める手引きや要法がすべて詳密に書かれてい